

# 『馬宿・馬問屋』執念の1冊

飯島町出身  
の都筑さん

## 辛抱と根気のいる本!?

南信州新聞社出版局から『馬宿〜近世街道のローマンチズム』が刊行されたのは2004年夏、今から8年前のことであった。

江戸時代、信州各地で農民の副業として発達した中継馬・馬稼ぎは中馬(仲馬・ちゅうま)と呼ばれ、折々眼や耳にする。大名など人馬を宿場から宿場へ荷物を送る仕事の余暇に、自分馬または駄賃馬で商人の荷物の運搬

を請け負い宿場まで運んだ中馬は、寛文12年に「百姓自分荷物付通し」の自由が認められて以来、長いときは往復一月以上もかけて直接目的地まで荷運びをするなど專業化が進んだ。この附運送のシステムを中馬といい、馬追いは馬士と呼ばれた。

この中馬については、市村威人・古島敏雄らによる研究はあったものの、中馬の泊まった

時代の変化は馬宿そのものの消滅の危機を孕(はら)んでいた。この危機的状況下に一石を投じたのが『馬宿』であった。またその波紋も少なからずあった。第1回飯田市歴史研究所賞受賞など、消えゆく日本の文化や習俗を記録と記憶に留め置かねばならないという焦燥を共有する心ある人々が挙(こぞ)つて呼応したのである。

それから八年間にわたる補充調査を経て書かれた馬宿に関する集大成ともいべき本が、このほど刊行された『馬宿・馬問屋〜近世街道インフラの研究〜』である。本書では、前著で積み残した「驚者宿と附属荷問屋」の相当部分が踏査された。

馬宿の資料から中馬の具体的な動き、扱った品物、馬荷問屋の役割等々、初出の資料も多く、中馬研究では必携の書ともいべき1冊になった。

一般の方向きの本ではない。活字に親しんでいる方でも取り付きにくい内容と表現である。そういう意味では、人が本を選ぶのではなく、本が読む人を選んでいる。著者が序で「さて、本書を御一読賜る読者諸氏には多少の辛抱と根気をいただく事になります。しかし、読了後には自己の取得した知識の豊かさに気付かれて、知的優越感を自覚する機会がより多く、到来するものと確信する次第です」と書く挑戦的とも思える自負はあながち五〇〇頁を越す大著に対する虚勢ばかりではないのである。著者の踏査に裏打ちされた論考に対

峙する者が出てこないだろうか、期待してやまないところである。著者の都筑方治(つづく・まさはる)さんは、1935年飯島町出身、飯田高校から中央大学に進み、卒業後、サラリーマンを経て、1973年都内に建築事務所を創立、代表取締役。群馬県大泉町在住。本書はA5判上製本512頁、定価4200円。お求めは最寄りの書店か南信州新聞社HPまで。(嶋)



500頁を越える大著

馬宿に着目し、馬宿に残された資料を踏査し、事業的環境機能ともいべき馬宿の調査・研究はそれまでなされてこなかった。加えて、

馬宿に残された資料を踏査し、事業的環境機能ともいべき馬宿の調査・研究はそれまでなされてこなかった。加えて、

馬宿に残された資料を踏査し、事業環境機能ともいべき馬宿の調査・研究はそれまでなされてこなかった。加えて、